

僕のワイルド体験

千葉 剛

昭和45年、この年僕は2度のワイルド体験を積む事になった。

恩師岡本成蹊先生が毎年夏になると信州の戸隠高原に逗留なさるのを聞いていた僕は、先生をお願いして戸隠での大学院生合宿を実行した。その時先生から示されたテキストがワイルドの *De Profundis* であった。先生は、ワイルドが入獄せざるを得なくなってしまった経過や、その間の人生観や芸術観、宗教観等の深まりについて丁寧に説明して下さいました。2日目の夕方、ふと気付いて窓の外に眼をやると急に黒雲が流れ始め、遠くの方で雷鳴が轟いたかと思う間もなく、どしゃ降りの強い雨が落ちてきた。その時の僕には、この様な強い夕立ちが、ワイルドの波乱に満ちた後半生の暗示の様にも思えたものだった。この年以來、卒業後も毎年夏になると戸隠高原を訪れ、岡本成蹊先生のご気兼ね伺いを重ねているが、最初の年程強い夕立ちにその後出会う事がない。

昭和45年11月25日、青空が澄んで小春日和とも思える様なこの日、正に青天霹靂の事件が起こった。三島由起夫が「楯の会」の幹部4名と共に陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地に乱入し、自衛官を前にして演説した後に、剖腹自決し果てたのである。『金閣寺』や『仮面の告白』、『潮騒』等三島文学に惹かれていた僕は、この事件の2年前（の大学3年生の時）に直接三島由起夫と会い握手した事もあったという経緯もあって、その驚き様はどの様な表現をしたらいいのか解らない程であった。その時三島由起夫が劇団「浪漫劇場」の『サロメ』を演出していた事を知り、12月になってから紀伊國屋ホールに見に行った。会場に立ち籠めている香の匂いや舞台上の白と黒に統一された色彩等はまるで三島由起夫の舞台葬式そのものであった。サロメの全裸での踊りもさる事ながら、井戸から顔を出したヨカナーンが、視線を前方の一点に据えて、一度もまばたきしなかったのには感心した事を覚えている。

この様にして僕はこの年を境にして世紀末作家オスカー・ワイルドを自分の内なるものへと転化させていったのである。つまり岡本成蹊先生との勉強会や三島の死が、結果として一人の学生をワイルドへと傾斜させていったのである。「日本ワイルド協会」が設立されると聞いて、学習院大学の荒井研究室に電話を入れたのは当然の成り行きだった。それから早10年の歳月が流れ様としている。

今世紀末に生きる僕達は、前世紀末の時代の寵児として活躍したワイルドから今後一体何を学びとるべきなのだろうか？100年という時代（時間）を超越して尚、生きているワイルドの普遍性を、彼の中から一つずつ確認してゆく事こそが、これからも重要な課題ではないだろうか。そうする事が、天才オスカー・ワイルドが被っている“仮面”の真実を明らかにする事になると思われるからである。

（東京農業大学専任講師）